「……っ！？や…！やめ……っ、」

簡素な木の扉を開けた瞬間、少年の腕は闇の中から伸びた手に捕らえられた。あっという間に部屋の中へ引きずり込まれる。

「だ……っ誰だ……！」

恐怖に悲鳴のような声をあげるも、答える者はいない。

腕を引く力は強く、か細い少年は易々(やすやす)と闇の奥まで連れられ、ばふっと柔らかい場所に躰を放り投げられた。

数多(あまた)の気配が少年ににじり寄り、荒い息遣いと下卑た笑い声が聞こえてくる。

「っあ……っっ、」

先程の手に痩せた胴体を抱かれ、びりっと釦(ボタン)の弾ける勢いでシャツを裂かれる。武骨な手が、少年の剥き出しの素肌に触れた。肌のなめらかさを堪能するように、手はあばらを撫で上げ、皮膚の薄い乳首をなぞる。

「……っや…、め…、」

ぞわりとした感覚に少年は身を捩(よじ)らせた――。

「どうだ。少年の様子は」

不意に扉のほうから声がした。

と同時に、辺りがオレンジ色に照らされる。そこは簡素な石造りの部屋だった。

家具は自分が今寝かせられている寝台だけ。

そんな粗末な部屋で、六人もの男たちが自分を取り囲んでいた。

声の主はワイン樽のように太った中年男で、片手に持った炬火(たいまつ)を少年のいるほうへ傾けている。

「そいつはなかなか良い代物だろ」

中年男は得意げに二重(にじゅう)になった顎をしゃくった。

「頭(かしら)、良いんですか？こんな上物(じょうもの)を俺たちで好きにしても」

目の前の男は少年の首筋を撫でながら口を開いた。

落ち着いてはいるが芯と張りのある声。

見ればこの男を含め、部屋にいる者たちは皆若そうだった。二十代前半くらい

だろうか。服の上からでもわかるほど、皆程よくがっしりとした体躯をしている。
しかしその若々しい顔や躰つきに似合わず、全員が、いかにも悪党らしい、どことなく荒(すさ)んだ空気を纏っていた。

「ああ。たまにはお前ら若い衆にも褒美をやらんとな。そいつは売るなり玩具にするなり好きにしろ。その代わり、明日からまたしっかり働いてもらうからな」

中年男がそう言うと、部屋の男たちは皆浮足立ったように喜んだ。
「よ！太っ腹！」と誰かが叫ぶ。
ちゃかすような男たちの雰囲気にふんと鼻をならし、中年男は明かりを石壁の燭台に挿し、去って行った。

「さてと、そういうことだから。君のことひとまず俺たちの玩具にしちゃうね」

「……んぅ…っ！？」

唇に押し当てられるやわらかい感覚。
目の前の男は少年の逃げ場を無くすように覆い被さり、唐突に口づけてきた。
男の躰からはこの薄汚れた場所に不似合いな、爽やかで甘い匂いがする。

「……ん、……っん…」

身を捩(よじ)らせて抵抗するも、男はなかなか口づけをやめてくれない。顔を背けようとする少年の顎を、頬に指が喰い込むほど強引に捕らえ、男は何度も唇を貪(むさぼ)ってくる。

「いきなりお熱いな～。おーい独り占めすんなよリーダー～～」

「頭(かしら)はこんな可愛い子どこで拾ってきたんだ？しかも服も靴も上等じゃねぇか。後であれ全部売ったら結構な金になるんじゃね？？」

「没落貴族の子どもだよ。いくら貴族っつったって、金と土地がなくなりゃぁ平民と一緒だからな。最近多いんだよこういうの。大方(おおかた)路頭に迷ったところを頭(かしら)に騙されて連れてこられたんだろうよ」

男たちが口々に何か言っているが、少年には聞こえなかった。
必死に男から離れようともがく少年。しかし彼の手は小さく、男の逞しい胸板を押し返すことなどできそうもなかった。

「んぅ…、ん……っ、ん…ッ！？！！」

固く引き結ばれた少年の唇を、男の舌がべろりとなぞる。息が苦しくなり僅かに開いてしまった口唇に、すかさず厚い舌を差し込まれた。

「ん″ぅ…っ！……んぁ……んっ……、」

歯列を割り腔内を蹂躙してくるそれは、まるで何かの生き物のようだ。唇と唇の間から、時折くちゅ、といやらしい音があがる。
当然だが今までにこんなことをされたことはない。
挨拶のキスや握手は何度もされたことがあるが、今自分がされてることは明らかにそれらとは別物だ。それだけは幼い少年にもよくわかった。
とにもかくにも、この状況が少年には恐ろしくてならなかった。ここから今すぐ逃げ出したい。強すぎる恐怖のために、不快感や嫌悪感を抱く余裕すら少年には残されていなかった。

「ん…っ、ぅ……、ん……っっっ、」

男の唾液が口の中に入ってくる。苦(にが)い。けれど後に甘みの残る不思議な味。

「ふ…ぁ……ぁ…、や、やめろ……っっ」

力を振り絞り男の手をやっと払いのける。
はあはあと荒い息の漏れる唇から、男のものとも自分のものともつかない唾液が伝う。

「ぼ…っぼくに……、こんなことしていいと思ってるのか…っ。貴族なんだぞ……っ、僕の家は…っ！か…っ、帰せよ……！いますぐ帰して……っ」

恐怖にばくばくする心臓に耐えながら、虚勢を張った。

男たちに話しかけるのは怖かったが、少年は助かりたい一心だ。

「う～ん。帰れるかどうかは、君次第かなぁ～？なあ、皆」

眼前の男は穏やかな笑みを浮かべ、さも軽い調子で言う。

「ど……、どういうことだ…っ」

「俺たちの言うこと素直に聞いてくれたら、帰してあげるってこと」

「……！」

もしかしたらもう二度とここから出られないかもしれないという恐怖を抱えていた少年の胸に、僅かではあるが希望の光が差す。

「わ…、わかった。言う通りにする……」

少年は男に覆い被さられたまま、震える声で返事をした。

ここから出してもらえるのなら、なんだっていい。

「いい子だねぇ。じゃ、まずはあれしてもらおうか。はい、こっちにお尻向けて」

「……っ！？」

男は少年の腕を引き、寝台の上で四つん這いになるよう促す。この場を去りたい一心で男に身を任せた少年だったが、武骨な手がボトムスのホックを外しにかかるのに気づき慌てて男を振り返る。

「だ～いじょうぶだよ。痛いことは何もしないから。ね？お兄さんのこと信じてよ」

男はよく見ればかなり精悍な顔立ちをしていて、にっこりと笑いかけてくる姿は見る者に涼し気な印象を与える。しかし彼の言動はどう見ても不審だ。誰が信じるものかと気強く思いつつ、やはりこの場をやり過ごし一刻も早く解放されることで頭がいっぱいで、少年はこの男たちにされるがままになることをもう一度決心する。

「わ…、わかった……」

少年は四つん這いのまま、大人しく俯いた。

「……っっ！！！！」

仕立ての良いキュロットを膝まで降ろされたかと思うと、立て続けに下着まで降ろされ、少年は酷くうろたえた。自分のいちばん恥ずかしい場所が丸見えになっている。医者に見せるのも恥ずかしい場所を、こんな見ず知らずの人々に暴かれるだなんて。
こんなことをして、一体この人達はなにを考えているのだろうか。

「はい、力抜いててね～」

「っひ……！？」

ぬちゅ、と聞き慣れない音が響くと同時に尻孔に冷たい感覚が走る。

「な…っ、なに……、」

驚きに腰をびくつかせていると、僅かに押し拡げられた後孔の窄まりから冷たい液体が次々に注ぎ込まれてくる。

「…、ぁ、……ぁ……、」

「お腹のなか綺麗にするお薬だよ。このままぶち込んでもいいんだけどね。先に綺麗にしておいたほうが、君も気持ちいいと思うし」

男が言っていることの意味が少年にはわからない。何の話をしているのだろう。液体はこれでもかというほど注がれて、少年の腹を満たす。少年の白い首筋に、玉のような汗が浮かんだ。

「ぅ…っ、……ぁ……、ぁ……、」

徐々に下腹が膨張するような感覚。寒くもないのに、躰を支える手足ががくがく震えだし、ぎゅるる…っと何かを訴えるように下腹部が鳴く――。

「この中にするんだ」

「…っ？！」

男が指し示したのは床に置かれた陶器のポットで、縁に蔦の絵があしらわれている。男の意図することがなんとなく見えたと同時に、少年の鼓動が加速する。まさかこんな場所で人に見られながら用を足せと言うのだろうか？貴族である自

分に？

少年は自分の顔が引き攣るのを感じた。腹のなかの苦しさは刻一刻と増していく。

「さあ遠慮するな。君は可愛いから、何したって可愛いぜきっと。恥ずかしがるこたぁない」

他の男たちに寝台から引き降ろされ、床にしゃがまされる。

「ぃ…っいや……！いやだ…っ！」

大きな目に涙を溜(た)めふるふると首を振るも、それを気に留(と)める者などいない。既に力の入らなくなり始めた剝き出しの下半身をがくがくと震わせながら、少年は左右の腕を別々の男に捕らえられている。

ボトムスと下着は取り払われているのに、靴下と上半身のシャツは身に着けたままなのも、酷く恥ずかしい。

しかしもう、恥などに構っている場合ではなかった。

「ト…、トイレ……っ！トイレ行かせて……ぇ……っっ！！」